



(左から)生徒会役員の青柳由里奈さん(2年生)、生徒会長の本間太智さん(3年生)、巨大絵実行委員長の阿蘇理子さん(3年生)。

地域との交流が育む、
農業への想い。

人が生きる上で、なくてはならない食。それを支える農業という分野だからこそ、地域社会とのつながりを大切にしたい。そんな願いから庄内農業高校では、生徒と地域住民との交流に力を入れてきた。

代表的な取り組みは、毎年11月開催の庄農祭。2017年は生憎の天気となったが、1日だけの一般公開にもかかわらず来場者は700人を超えたという。学校で育てた農産物やそれを使った料理・加工品などを求め、8時半頃から行列ができ、10時半には食券が売り切れてしまったというから驚きだ。「ラジオで宣伝させてもらったこともあり、たくさんの人に来ていただくことができました。テーマである『I know 愛♥農』の通り、僕たちの農業への想いを伝えられたと思います」と、副実行

描き上げた。「マス目に色紙を貼る方法で絵をつくっていくんですが、1つずつマス目の色を決めたり、5万枚の色紙をつくったり、とにかく準備が大変でした」と、巨大絵実行委員長を務めた阿蘇さんは振り返る。「でも、たくさんの方が絵の前で足を止め写真を撮っているのを見て、本当に嬉しくて苦労も吹き飛びましたね」。

10月開催の「つるおか大産まつり」も、地域との交流の場として欠かせない。生徒会役員の青柳さんは、加茂水産高校と共同開発したお菓子「心をこめて蟹米ました。」を振る舞った。とにかく「庄農らしさ」にこだわったというこのお菓子、実はまだ味つけを決めかねているという。「加茂水産高校提供のカニの甲羅と、庄農の米でつくった米粉を使っています。既製品を使えば味を良くするのは簡単ですが、できるだけ自家製にこだわりたいんです。アンケートでは厳しい意見もいただきましたが、諦めずに改良を重ね、もっとおいしいお菓子にしていきたいと思っています」。

庄内の農業を支え未来を切り拓いていく人材は、地域との交流を糧に、着実に成長を重ねている。

Cradle
高校生編集部が行く
スゴハイ¹¹
SUGOI high school students in Shonai
Supported by
庄内広域行政組合、山形県庄内総合支庁



取 材 テ ー マ

外の世界と 学びでつながる 高校生

学問が、その枠を飛び越えて活用されるためには、
社会や他分野とのつながりが必要です。
学校で身につけた専門性を発揮し、
地域と世界とつながる高校生を紹介します。



取材：鶴岡北高新聞部

近くで見ると、確かに1マスずつに色紙が！

一般参加のみなさん、楽しんでますね。つくってますね。

マス目の色を指定する資料、本当に細かい！

NEW FACE
すずか

取材後、アサガオの種をいただきました。



加茂水産高校と共同で開発した、「心をこめて蟹米ました。」。左下のキャラクターも共同で考案したものだという。



農産物など販売するものはもちろん、ポスターなどにも「庄農らしさ」がまっている。

黄金色の田んぼと晴れ渡った青空を、見事なグラデーションで描き上げた巨大絵。

委員長を務めた生徒会長の本間さんは言う。

一般公開の前日、庄農祭初日には地域の方とともに巨大絵を制作した。昨年度から始まった取り組みで、今年は地域住民約70名と全校生徒で、秋晴れの稲刈りの様子を縦10m横14mの大きな絵として

パソコン上でつくった3次元のデータを立体物として具体化できる、3Dプリンターという機器をご存知だろうか。手軽に試作品がつくれるということで、近年さまざまな産業分野で活用され始めている。早くから導入を進めてきた鶴岡工業高校では、2017年8月に5名の2年生によるプロジェクトを立ち上げ、10月に国際会議に参加した。

きっかけは、同校の高校・大学連携プログラムで、山形大学工学部古川英光教授の研究室を訪れたことだった。その際、山形大学工学部主催の国際会議「SmaSys 2017」でのポスター発表を提案していただいたそうだ。

「サボニウス型風車※について研究してほしい」とても大きなオーダーを、具体的な作業に落とし込むことは、簡単ではなかった。「何をどんな指標で調べるか、そのためにどんな装置が必要か、ゼロから考えることが一番難しかったです」とリーダーを務めた五十嵐さんは言う。普段の授業で交流の機会がない異学科の5名で話し合い、プロペラの形状と発電量の違いを

研究のおもしろさは、チームプレーにあり。

(後列左から時計回り) 機械科・佐藤聖渚さん、情報通信科・佐藤龍希さん、小林桜花さん、五十嵐快さん、環境化学科・佐藤瑠哉さん。



ジェクトを進める上でも、さまざまなスキルに触れたという点でもよかったです」と瑠哉さん。

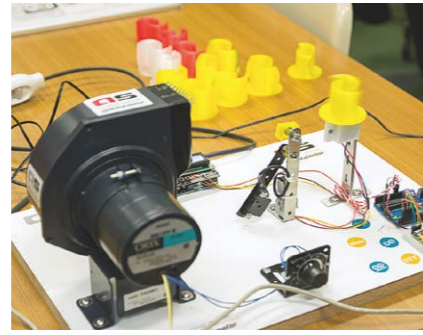
実験を重ね、「プロペラの表面積が大きくなれば発電量上がる」という仮説を見事証明。「ゼロから考えた研究で仮説を証明できたことが、とても嬉しかったです」

と小林さんは言う。

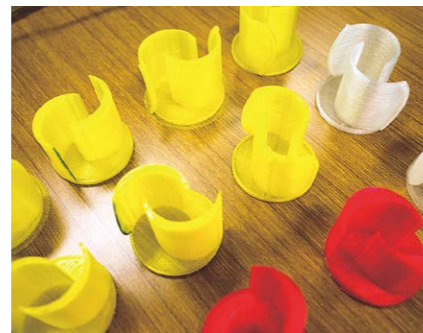
「SmaSys」で高校生が発表したのは、彼らが初。研究者に混ざったの英語でのポスター発表は大変だったようだが「外国人研究者の方が、自分の英語に耳を傾けようとしているのを見て、通じたことがわかり嬉しかったです」と聖渚さんは振り返る。

今後も継続して研究を進めていくという5名。「プロペラの重さなど、表面積以外の要素も考慮し、精度を高めていきたいですね」と龍希さんは言う。チームで研究に取り組みおもしろさに気づいた5名の未来が、楽しみでならない。

※サボニウス型風車：風向きを選ばず、弱い風でも発電できる小型の風車。音が静かなため市街地や住宅地にも設置可能。



実験内容に合わせて、ゼロから製作した実験装置。送風機器は、地元企業から無償で提供いただいたものだ。



3Dプリンターで製作したプロペラ。風が当たる表面積が少しずつ違う。



取材：酒田東高文芸部
3Dプリンターの猫はお土産にいただきました。

3Dプリンターで猫をつかってもらいました。
小さいのに精巧です。
自作でこんな本格的な装置がつけちゃったんですね。
これが、今回つくった実験装置です。

編集後記

庄農生のみなさんにお話を聞き、農業を愛し、地域の人たちの関わりを大切にしているということを感じました。庄農祭でも、地域の人たちと協力し巨大絵を製作したり、育てた農産物を販売したり、心から地元を愛しつなろうとしているのだと思いました。私も地域の魅力を発信できるような新聞をつくっていきたくです。(なおみ・鶴北)

本格的な実験装置をすべて自作したということにとっても驚きました。また、プロジェクト開始時点では互いのことをよく知らなかったにもかかわらず、それぞれが得意なことを發揮し合うことでいいチームをつくり上げた聞き、みなさんの団結力を感じました。3Dプリンターなど、工業高校ならではの機器を見られたことも印象に残っています。(とまか・酒東)

編集部員&特ダネ まだまだ募集中!

「スゴハイ」の企画制作をやりたい高校生、「こんなスゴい高校生知ってる」「私、スゴいんです」などスゴい高校生の情報は随時募集中です。お気軽にご連絡ください。

ご応募・お問い合わせ先
Cradle事務局
info@cradle-ds.jp

編集・文=Cradle高校生編集部、工藤 拓也
写真=間 真由美
協力=庄内農業高等学校、鶴岡工業高等学校
鶴岡北高等学校、酒田東高等学校